

Home to Home ～hitachi の香港 1 人旅、時々 2 人旅～

2012 02 03 - 2012 02 08

まず、この旅行記は小説風かつ写実的な色彩が強いことを断っておく。旅行の写真については別途[フォトギャラリー](#)をご覧ください。

第0章 出発

エンゲル係数を下げることには拘っていた私は、昼食をもらいもののカップめんを済ませ、家を出るまでの3時間を落ち着きなく過ごしていた。基本的に旅の情報はマニュアル的なものから得るものではないという信念があったため今回の香港旅行についてはろくに調べていなかった。これが後々泣き面に蜂となるのは言うまでもなからう。

日常と非日常の境目がどこだろうか。新鎌ヶ谷か。成田空港駅か。

私にとっての2012年2月3日は何の特別な日でもなかった。普通に朝を向かえ、いつも通りに朝食を作り、パソコンに向かっていた。だが、成田の巨大ディスプレイに自分が乗る「DL639便」を見つけたその時、ああ旅行に行くんだなと実感した。自分はもしかしたら離人症かもしれない。明日が旅だ！などという実感がわからないものである。もし実感していたならば、もっと毎日が楽しいだろうに。

3回目の海外旅行となる私にとって、出国・入国手続きはまだ新鮮なものだった。あと数時間後には別の世界にいるということは受け入れがたいものである。

離陸30分に機内へ案内された。窓側じゃなく通路側で残念であった。着席してからずっと窓側の人が来ないようとお祈りしていたが無効だった。しかしアジア系の紳士であり、快適な旅が容易に想像できた。助かった。リモコンの操作方法を教えると驚くほど流暢な英語で「thank yo~u」と返事してきたので英語圏出身と間違えるほどであった。

私が乗った機体 A330-300 には背面モニター完備。いかにもアメリカンな音楽・映画が搭載されており、アメリカに行きたくなってしまった。単純すぎる自分である。映画は R 指定が殆ど。見る気がおきなかったため音楽を聞きながらマップで現在位置を随時確認してフライトを楽しんだ。

CA もぼりぼりの英語を話す人間で、ちょっと通じるかびびった。まだまだ日本人である…。

機内食は美味しかった。そもそもそんな味にうるさくない私に言わせてみれば基本的にどれも合格となるのだが…。カバーについていたシートの裏には sudoku が印刷され、隣のアジア紳士は着陸の間も夢中で解いていた。私はまだやり方を知らず、これを書いている今もまだ放置している。

眠りたくても眠れない状況のまま、香港到着の時間がやってきた。

機体はエンジンスロットルを落とし、急降下し始めた。おかげさまで気圧変動特有の頭痛に襲われた。確か台湾のときにも襲われた気が。鈍いエンジン音と共に、やけに高いフラップダウン音。羽根への気流が減ったのか、がたがた揺れ始めてまだエンジンスロットルが上がったと思うとズンと落ちた感覚になる。ギアダウン（車輪降下）したのだ。そうこうしているうちに外からさりげなく香港の細長い高層ビルが見えてきた。地震が来たら一瞬でアウトなほどの細長いビルが、これでもかというくらい建っている。無理しすぎだ。

隣の紳士が sudoku を夢中でやっている最中、香港国際空港に無事到着した。入国審査が混むと聞いていたので早めに前のほうに行ったが結局荷物待ちで台無しだ。入国審査官がパスポートをぶん投げてきて、日本人の女

性が良いと思っっているうちに、私の香港生活が始まった。汗かいた。

第1章 恐怖のチョンキンマンション（重慶大廈）

超がつくほどの格安航空券で行ったため、香港到着はなんと23時すぎ。結局日付変更は移動中の地下鉄の車内となったらしい。

何度か眠い目をこすりながら乗換えをし、数日間お世話になるチョンキンマンション最寄の「ティムサチヨイ」に到着。さすがに0時を過ぎているからか通りは真っ暗で人がまばら。インド系、黒人系の人々がたまにすれ違い、客引きをしてくる。助けてくれそうな人も周りにはおらず非常に怖かった。

チョンキンマンションを発見したもののインド系の客引きが結構近い距離まで攻めてきたため小走りで行って行った。中はシャッターが閉まり、まさにスラム街かという感じだった。幸いエレベーターで宿の案内人に会い、自分は日本人で中国語で広東語はわからないというと言われた。だが連れて行かれたのは黒人だらけでやけに派手な部屋。そこで1人の黒人にスーツケースを支配され、裏の暗い階段に案内された。ああ、ついに殺されるのかと思ったが、別のフロアで違う経営者？に引き渡されただけで済んだ。しかも凄いフレンドリーな人で、英語も通じたし中国語も少しわかるみたいなことを言ったら熱烈歓迎してくれた。（新香港旅社/New Hong Kong Hostel）

恐怖と感激を一度に味わい、刺激に弱いデリケートな私は宿に入ったものの目が冴えてしまった。

部屋は覚悟していたよりもずいぶん綺麗で、ちょっと狭くて、スパイシーな謎の香りのするところだった。

正直なところ、ネットの評判は値段と比例して最悪で、その原因が入り口の客引きや雰囲気悪さに起因するものだった。ロケーションはティムサチヨイの中心部で最高だし、ちょっと狭いくらい背の高くない自分には没問題（モウマントイ）であった。スーツケースも置けないくらい狭いことを覚悟していたが（苦笑）

何も広東語の恐怖も知らず、日付が変わって1時間ほどして意識を失った。

第2章 新界へ

いつも通り6時40分くらいに起き（時差の説明は略す）、水を求めて外に出てみた。

昨夜来たときに比べればまだ雰囲気はよく、謎のインド料理店がいくつか開店していた。両替はまだしていないものの3日間鉄道乗り放題チケットがあったので早速朝から探検に出ることにした。

まず行ったのは中環（セントラル）。何気に香港島のほうである。残念ながら巨大オフィスとデパートばかりで私のような貧乏人の行くところではなかった。地下鉄ホームのwifiで必死に調べてティムサチヨイでぶらぶらした末に、適当に地元に着いてそんな店に入った。

Tea or coffee?と聞かれ、当然のようにteaを頼むとやってきたのはmilk tea。そうか・・・イギリスの植民地であることを忘れていたよ香港さん。台湾でウーロン茶を頼めば当然のごとく砂糖入りの甘いのが来るし、香港ではイギリス作戦ですか。確かにcenterがcentreになっているなどイギリス英語の特徴をそのまま踏襲しているのは頷ける。イギリスぶった中国といったところだ。

値段の割りに少ない（値段相応？）朝食を食べてから、せっかくなので北のほうまで行ってみた。

特別面白い景色もなく、LRT(ヨーロッパ発祥の最新鋭路面電車とでもいっておく)もそれほど普通で、マックでつながるはずのwifiが繋がらず、激しいし全くわからない広東語ですっかり萎えてしまった。

この香港に4日以上もいたらどうなるんだろうな・・・そこに救世主が現れるのであった。

第3章 ちょっとリゾート気分

昼前に宿に戻って仮眠をとったのちに、香港プチ滞在中の日本人のKさんと会った。香港人はなんか激しいし「っ」のやたら多い広東語ばかりを話す。そうしているうちに不安になっていく中での助けにもなったし、自分なら絶対気ままに行動して退屈になっていた2日間（午後）を幸福溢れるものにしてくれたKさんには感謝しき

れない。

まず行ったのは昼食。そこそこ大衆向けな感じの店でいくつか頼んで半分ことかしながら食べた。

やっぱり本場の中華は脂っこいな… 深夜到着で疲れていたからかもしれないが、明らかに多くは食べられなかった。

その後、気になっていたランタウ島へ向かった。大仏などいろいろ？あるらしいが漁村風景が綺麗らしいので Tai O へ。東湧駅からバスで 30 分ほど。想定外のいろは坂ぶりで一気に酔ってしまった…。

Tai O は確かにリゾート風味のする香港らしくない綺麗なところであった。だがバス酔いでふらふらの私に追い討ちをかけるかのように魚市場の独特の生臭さやすっぱい臭いが立ち込めてきた。少し歩き休憩。

また同じバスに乗りたくはないということで、帰りは船での移動。空港の脇を走るため非常にテンションが上がる。

東湧のショッピングセンターで wifi 実験(?)をしたのち、香港島に戻って夕飯。旅の疲れだかただの体調不良からか魚の揚げ物を食べたらまた気分悪くなってしまった。

κさんと別れてから、香港といえば！の二階建てトラム(路面電車)に乗車した。鉄腕DASHや高校時代の交通の研究で知っていたものの、まさか乗りにくとは思ってもいなかった。

オクトパスカードの3日間乗り放題？みたいなのを買ったためかチャージが出来ず？結局小銭で支払うという面倒なことになった。香港の通貨にはいろいろあるしドルのほかにセントまであるから財布から出すのも一苦労であった。セントを知ったのがこの日ということは内緒である。。

二階建てトラムは確かに眺望は良いものの、全く駅の案内もなく地下鉄との連絡がわからないため非常にサバイバルであった。結局終点まで行ってから小銭崩しに超市(スーパーマーケット)でミネラルウォーターを購入し、また乗って中環まで戻った。

初日の客引きによるトラウマからか、2日目は早めに宿に戻った。刺激多き激しい一日であった。

第4章 ちょこっと中国♪

シンセンが近いという噂を聞いていたため、午前中は中国シンセン訪問。

何回か乗り換えをして、40分近く退屈な車窓を眺めていると国境の駅(羅湖 lo wu?)に着く。

その駅はそのまま国境ゲートにつながる駅で、乗客が一斉にゲートに向かった。看板には、「中国居民」「香港居民」「台湾…居民」「Foreigners」「e-channel?」などと色分けがされ、ここで国の違いが明確になる。

あまり意識しないものだが、出入国審査のところでのこのような仕分けが非常に自分の日本人というアイデンティティを表している気がするものである。隣のレーンには明らかな韓国人がいたり、前にはマレー系の女の人だったり(香港ではたいてい小さい携帯マイクを使って通話してるのを見かけた)白人の人がいたりする。意外と面白いものである。

チョンキンマンション同様に、世界中の人々が集結している感覚になる。日本からちょっとやってきたぜ！という親近感といえればいいか。

さて、お出かけ気分で中国に入国できた。初めての海外が北京だったからその感動がよみがえった。赤い背景に白や黄色の字。ゴシック体とあからさまな簡体字がいかにも中国で、安心感をもたらしてくれた。

前回の海外(台湾)が9ヶ月も前でだいぶ中国語が上達?したため、土産屋でも結構楽しく話すことが出来た。なんと広東語じゃなくて北京語だったのだ！あとあと聞いた話だが、シンセンは移民の都市でみな北京語を話すそうだ。ちなみに香港ドルも没问题。Xiang gang yuan ok?と聞いてokといわれれば問題なく使える。

午後からκさんとの観光ツアー?を控えていたため今回は簡単に見学してすぐ香港に戻った。

脱線でおなじみの中国新幹線の改札あたりを見学。おそらく入場券は売ってないだろうし香港ドルを人民元にするのも癪だったので今回はあきらめた。中国の鉄道に関しては3月下旬の大連旅行の際にちょっとかじってみようと思う。

角刈りいっぱい中国から、広東語でうるさい香港へ戻った。
また昨日同様に宿で20分くらい仮眠をとり、κさんと会ったのであった。

第5章 九龍散策

宿でwifiが使えたため(本当に助かった!なかったらと思うとぞっとする) Jordan 付近での美味しい店を調べてみた。名前は面倒だから書かないが、Jordan 駅のC1出口で確かκさんと会ってすぐのところで食べた気がする。海鮮系、そしてツアーなどの昼食で使われる感じのそこそこ大きな店であり、なかなか美味しかった。

謎のふにゃふにゃしたのから包子?、エビの料理?。なかなか美味しかった。中華系はもう脂で毒されていたけれどここではそんな苦にはならず美味しくいただけた。

食べてから、私が作成した即席旅行計画(笑) 台湾のときもそうだったけれどどうしても旅行の計画って立てるモチベーションがおきないものだ。行ってからなんとかするのがモットーとなっている。ガイドブックは高すぎる!wifiなら無料!!

このあとは確かJordan 駅近くの店が並ぶ通り、~街を巡り、香港のアキバ的などところにも行った。

側面オンリーという可愛そうなiphoneカバーを捨て、まともなカバーを購入。なんと180円だ(苦笑) κさんもスマホカバーでいろいろ悩んでいたみたいだ。自分ももうちょっと俗世のものにこだわったほうがいいかなと思ったけれど、そう変わりそうにはない(笑)

店を後にして「数珠」などのアクセサリ系が大量に売られているところに行ったり、謎の公園に行ったり、十二支のお寺?に行ったりした。

台湾の神社みたいに棒をふる占いがあつたけれど、占いなんて信じない私にとっては無敵だ(謎)

十二支ほとんどの動物風の銅像がいて記念写真。ああ自分の写真撮られるのはあまり良いものではない。

ちょっと休憩した後、九龍公園へ向かった。

どうせただの公園だろうとタカをくくってはいたが、なんと良い方向に。

どうやら香港ではメイドさんを家で雇うところが多らしく、マレー系やそっち系のメイドさんが公園で休んでいるようだった。でもなんかりズミカルなヒップホップにあわせて腰を振って踊っている集団がいるではないか。κさんに「参加してきたら?香港の文化だよ!」と真面目な顔で言われたが、その表情と踊っている集団のやっていることが正反対すぎて笑ってしまう。

ほかにも熱帯雨林風の植物園やら鳥の憩いの池などがあり、ネイザンロードがすぐそこにあるとは思えない自然ぶりだった。しばらくそこでゆっくりし、小腹がすいてきたところで昼に大量に余らせたご飯を食べた。

自分はあまり食欲がなかったが、κさんは夢中で食べていた。手つかみで食べて大丈夫だったのかなと完食後に言われてももう遅い(笑)

九龍公園内にはいくつかの教育的な博物館がある。自分なら絶対行かないけれどκさんのおかげで行く機会となった。知識を学ぶなら家でもできるという硬い考え方を少し柔らかくしたいものだ。こういう意味合いで2人旅も視野が広がって良いと思った。常識的な?食品衛生博物館、香港おなじみの竹足場博物館(鉄骨じゃなくて普通の竹が足場に使われる。竹余ってるのか。)などに行ってみた。

九龍公園を後にして、κさんがチョンキンマンションの部屋を見たいということで見せてあげて、夜景のほうに向かった。(倫理的道徳的に、宿に宿泊者以外を入れてはいけないみたいなのがあったら宿の人がno problem~~といった。そんなゆるくていいのか? よくよく考えてみると枕2つあるしシーツピンクだし怪しいぞw 自分にはまだ早い!というか知るか! まあ旅の恥はかき捨てさ!)

まともに見ていなかった香港の夜景。見てみると100万ドルとか言われる理由がよくわかる。こんな狭いところにアホか！と突っ込みを入れたいくらいビルが密集している。イギリスの植民地かつ交通の要衝（ドバイみたいな）にならなければこんなところにはならなかっただろう。世界中の人々が集まってきている感じがするし、日本の京都に比べてもとんでもないところだと感じた。

夜景ハーバーショーはレーザー光線を振り回すだけ？という感じで、まあ触れてはおかないでおこう（苦笑）
もっと凄いのがみたかったとかいうことを言っても無駄なので、ありのままで満足しておく。

夜景を見る人々も激しい中国語を話す人々から韓国人、白人、日本人と多民族。多くは家族、友人で着ており1人で来るにはちょっと寂しいという印象を受けた。もし1人で来てたら夜景を見てそそくさと帰っていたらだろうな。近くに1人で来ていたアジア系の子が泣いていたのが印象的だった。フラれたりしたのだろう。まあまともな愛情を知らぬ私には無敵だ。哈哈哈哈哈哈！

スターフェリーという船で香港島に渡れる。地下鉄に比べると安いのが香港島側のアクセスが異常に悪かった。昨日同様に香港島でκさんと別れを告げ、一路ビクトリアピーク（山）へ。

ケーブルカーは結構高かった。しかも行ってから更にお金をとることが判明し、しかも日本語で「キョウ、クモツテテミエマセン」は？ふもとで言えよ（笑）

しかしながら可愛い店員が日本語で話すものだから少し冷やかしにも会話をして帰ることにした。

「Your Japanese is good!」 「啊,, スコシワカル。。」みたいな会話をして悔しいながらもバス酔いしながらふもとに戻った。にしても2, 3回すぐ日本語で返事されたのだが、そんな日本人ってわかるものなのだろうか？それが観光の無念に比べて非常に気になり、興味深いと思ったのであった。

そんなこんなで色々身のつまった1日がまた幕を閉じ、香港旅行も後半に入るのであった。悲しいものだ。

第6章 決死のマカオ脱出記

残り2日間は特に未定で（オール1人旅だったら今考えれば恐ろしいくらい暇になってたかもしれない。くわばらくわばらである）、マカオに行き、最後はゆっくりぶらぶらして旅の疲れを減らそうと思った次第である。

というわけで2/6はマカオ。

広東語とポルトガル語しか通じないのはわかっていたが、「せまい」「観光しやすい」「いい!」という3拍子に華麗に騙されてしまった。

わくわくしながらジェットフェリーでマカオに到着するも、バスの運転士は激しく拒否するし、みんなツアーのほうに行くし、字読めないし、英語であるべき部分がポルトガル語でまったくわからないし・・・

精神的に参って後から船酔いしてしまった…。

あ、そうだ！wifiやってみよう！！私にとっての旅のメシア、wifiの登場である。メシアは3人？いて、1つがwifi、もう1人がκさん、最後の1人が最後にご馳走して頂いたεさんである。他にも多くのメシアがいることは言うまでもない。感謝感謝である。

一応キリスト教だろと思い、祈りを捧げると神はwifiを通してくれた。

とりあえず娯楽場（カジノ）へは無料バスが出ているので飛び乗ってみた。いやー独特な雰囲気だ。

香港よりもなんか暗いというか密集しているというか、雰囲気が違う。

バスは良くわからないところで停車。結局英語も通じない覚悟でタクシーの運ちゃんに話し、観光ガイドの21番までお願い！と乗せていってもらった。

タクシーはいつまでたっても目的地に着かない。建物もなんか古ぼけているし香港よりもなんか霞んだ感じ

のマカオ。メーターはどんどん上がっていく。2, 30 ドルと約束したのに 50 ドルくらいとられてしまった…。

降りたものの方位が全くわからない(笑) 確かに狭いだろうけど密集しすぎていてどう行けばいいかわからなかった。ついにマカオの毒を吸ってしまったようだ。1つ目の毒は言葉の壁、2つ目の毒は迷子、3つ目の毒はカジノである。

普通の日本人観光客なら多分普通にお金を出してツアーとかに参加していただろうけど、私は1日だけをマカオに割り、それほどリターンを期待していなかった。

雰囲気もなんか暗く、(天気の子?) 地元民の通りは八角などの特有の臭いがきつかったため、とても中国嫌いな方向になってしまった。旅の疲れ、1人旅の寂しさ(前日前々日と2人旅をすればそりゃ寂しくなる。人と触れ合うと後が辛いものだ。)も体を蝕んでいる気がした。大丈夫か次の台湾、大連旅行。

世界遺産系は密集していたため一通り見る事が出来た。世界遺産風の建物にスタバが入っていたりするため、実際のところよくわからない。でも図書館の奥の公園がwifiスポットになっていたり、黄色とか緑色の教会で普通に寝ることが出来るため癒しにはおすすめである。でも言葉が通じないから1人で行くのは良くない。たとえ貴方の笑顔だけで人生なんとかなろうとも(は?)

すっかりマカオの毒を受けた。みやげ屋に行っても英語が出来る店員が限られている。売っているものはなんか日本でも買えそうな・・・しかし安い。美味しくなかったら親にでもあげ(略)

べつの島にも、広州との陸続き?の国境にも行く気がおきなかった。しかもバスは両替できないし運転士にも拒否られ、何か買うのもかったるかったため、自力で歩いてフェリー乗り場に向かった。

しばらくどこを歩いているか理解が出来なかった。2時間くらい歩いてやっと通りの名前を観光マップにあるのを理解し、フェリー乗り場に向けて歩き始めた。結局夕方17時すぎにフェリー乗り場へ。なんか観光であれこれ悩まずに地元民の生活を垣間見るのも悪くないと思ったのである。犬の競馬場(競犬場?)を見たりカジノをチラ見したり、中学生の帰宅時間帯にぶつかってうるさいなあと思ったり、たこ焼きっぽいのを売ってる店にカメラ向けたら笑ってどいてくれたり、…

マカオは天気の悪いときに行かないほうがいいと思う。建物が古めかしいといふかなんかぼろいといふかバラックといふか、…裏通りとか凄いくらいしどこからともなく中国の「あまり好かれぬ臭い」が来るから刺激が強すぎる。マゾな方はどうぞ。私はもう行かないと思う。広東語は難しすぎてマスターできないだろうし。ネイハウ、ドゥオゼー、ゾイギン、ゲイチンも忘れるのは時間の問題だ。

正直フェリーターミナルについたとき、ほっとした。不安と船酔いの絶頂で1日お先真っ暗だった此処に、無事最低限のミッションを終えて戻ってこれたからだ。帰りの船が行きより高く(1700円ほど)イラっときたり、出国審査官がスタンプ押した瞬間に無愛想になってこっちの人間理解できねと思ったりしながら、人生最初で最後であろうマカオを後にするのであった。

第7章 ネイザンロード・チョンキンマンション・九龍公園

こっちに来てから戒めにしていた「日本の音楽」を再開した。やっぱり日本政府嫌いでもアイデンティティは日本人だ。海外に来て日本語を見ると自然と笑みが出る(にやにや?)し、日本人とかと話さないとなんか辛いものである。とりあえずiphoneでYUKIを聞きながらぼーっとした。海外の人は自分の日本語iphoneを見たり、日本国passportを見たりしたときどう思うのだろうか? マレー系の女の人は人柄的にもニコニコしてくるだろうし、韓国人は睨んでくるか眼中にないかもしれない。そんな日本人の立ち位置を意識させられた。正直どの国にもいいところ悪いところあるし、どうでもいいのかもしれないけれど。

日本の音楽を聴きながらうとうとして落ちていくうちに、香港島に帰ってきた。夕飯はどうしようか? あ、チョンキンマンションのインドカレーを食べよう。

チョンキンマンションはもともと1人用アパート(個人主義はイギリスの影響)だったが廃止になって安宿

となったもの。低層階にはインドカレーレストランや、怪しい時計の店、洋服店など様々な店がうごめいている。インド人、黒人、アラブ人、日本人、白人…が同じ1つの建物で屯している有様はまさに「人種のるつぼ」だ。

1つのインドカレーの店に寄ってみる。電話を終えたオーナーは気さくにもいろいろ話してくれた。ちょっと癖がある英語だったけれど日本から来たことを話すと、友達のサッカー選手が日本で活躍してるとか tokyo! konbanwa とか気遣って話してくれた。やっぱり行商人だからか、旅人相手にしているからか、何も壁がない状態でのコミュニケーションが楽しめた。基本みんな優しいんだなと思った。エレベーターで黒人の人が荷物運びでなんかいろいろあったときも、no problem っていつてくれたし。日本人だとどうしても黒人とエレベーター2人っきりはびびるけれど、関係ないんだなと。そう考えると近いのに世界中から人が訪れる香港、マカオはお買い得だと思った。あ、マカオも書き忘れてたけど世界中から人が集まっている印象を受けた。

広東語はもうお手上げだけど最低限の英語ができればなんとかなる。北京語を話せるともっとフレンドリーになれる、そんなところだと思った。でも中国台湾のように北京語メインのところのほうが性に合ってるなあ～

そんなこんなで狭いけどまあ快適な宿でカレーを食べ、CCTV（中国国際テレビ?）を見て簡体字の字幕に安心しつつ大変な1日を終えたのであった。

2/7はほぼノープラン。ネイザンロード周辺を歩いてみるということをしていなかったの、10時くらいからぶらぶらしてみた。

朝はなんだっただろうか？確か適当な食堂に入ったら日本人旅行客2人組がいて、日本語の看板見て大笑いして自分もノリでちょっと話した。自分は人と親しくなるのはそう得意ではないため、（草食系というか消化不良系だろうw）後々親しくなりたかったと後悔することが多々ある。あまりに距離縮めると引かれるだろうし、突き放されることは昔からトラウマのようにあったこともあったから。でもこの信頼できる距離そのものが人間関係の根本であると思う。もたれあったり依存しあう関係になるのなら、最初からそんな友人もたなければいい。生きているの苦しければ死ねばいい。それが私の根本の考えである（何）

ビクトリアピークでジャッキーチェーンの銅像を見たり、wifiからツイートしまくってみたり、日本製の食品の値段の高さにびっくりしたり、そんな感じですごしていた。

ネイザンロードには本当にいろんな店があるんだと思った。日本の本限定の書店で広東語講座を読んだり、大きなショッピングモールに入ったら記念写真頼まれたり。びっくりだ。

昼はたいしたものは食べた記憶がない。香港人は根は優しいけどやっぱり激しくて怖い印象だけが脳裏に焼きつく。

その後は宿でのんびり、一昨日にゆっくりした九龍公園でまたのんびり、chinese city?に行ってみたり。

それからは宿で疲れを癒していた。19時あたりまで。そして香港滞在における最後のイベントがやってくるのであった。

第8章 ㄘさんと晚餐

ネットでたまたま香港在住で同じ茨城出身、母校出身、鉄道ファンのㄘさんと会う機会となった。はたまたご馳走まで頂いてしまった。ご覧になってはいないとおもうが、この場を借りて感謝を申し上げたい。

たった2.5時間ほどだったけれど非常に濃密で楽しい時間をすごせた。母校の思い出話、鉄道の話、就職の話、こっちの文化の話など……

広く薄い関係みたいでいると、外面がいいとか言ってくる奴がいるけれど、果たしてどうだろうか？

いつも親しいようで実際は依存し合ってるゴミな関係かもしれないし、恋愛とかいって恋愛してる自分に自分が惚れてるだけかもしれないだろう。

何事も最終的にはありがたみを感じて幸せを感じるものだと思う。バイトができるだけでも有難く、なかなか会えない友達と会えるから有難い。それが多分幸せそのものなのかもしれない。

だが、有難いことによる幸せへの耐性が、残念ながら私にはあまりない（笑）

つまり、最終日 4:50 起床なのに興奮の余り寝れなくなってしまったというわけだ。

旅行後しばらく私がそれを引きずらせるのは言うまでもない。

第9章 後は帰るだけ。お迎えは雪とから揚げ

無事4時すぎに起床して二階建てバスで空港へ。

やけに綺麗で広い香港空港に感動を覚えつつ、香港を後にした。

残念ながら通路側だったが、なぜか窓側に移れた。なぜなら、何人かのアメリカ人がどんどん席を移動していったためである。CAもこれに対して咎めない。絶対的な指定席というわけではないのだろうか？

私は幸運にも2席確保し、2テーブルで機内食と sudoku を楽しむという贅沢な空の旅を楽しんでいたが、右を見るとなんと4席確保して横になって熟睡してるおっさんがいるではないか！！

飛行機に対する敷居の差だろう。日本の航空会社は出来なさそうだが…

そんなこんなで着陸の衝撃をばっちり楽しみ、日本に帰ってきた。税関を通るときの緊張感はいつも通り。JR成田線経由で帰宅した。我孫子でから揚げうどんを食べていると雪が迎えてくれた。

とても寒い。もうこの旅は終わったのだ。

おしまい

あとがき

香港はとんでもないところだったなあと帰国してから呟いていた。

マカオはもっと凄いところだった。そして、安定の中国（笑）

想定の2倍も3倍も超える、津波も超える思い出が私を流して行ったようだ。

KさんおよびTさんとの出会い、交流、そしてチョンキンマンションでの世界のどこかの人との交流、そして香港・マカオ・シンセンの地元民との出会い。

ちょっと4日間強は長かったかもしれないけれど、十分に満足が出来た旅行であった。

私のとりえというか趣味は旅行くらいしかない。しばらくはまた運の貯蓄に入るのかな（笑）

社会人になるまでの数ヶ月間（院に行けばのびるが・・・）は私にとっての旅の拡張期だ。

このあとも静岡/台湾、北九州/山口/新潟、大連旅行が待ち構えている。

幸か不幸かわからないけれど、きっと幸せである人生だと思えばいいと思いつつ香港旅行を閉じたい。